

[Cheat on NP] の概念研究

——認知言語学的アプローチ——

森 山 智 浩

1. 研究意義

森山（2018）では、軽視事象表示の [look down on NP] における形態と意味との関係を取り上げ、認知言語学的観点からその概念的結びつきを見つめることにより、語彙学習指導における照合フィルターとしての役割をも果たす言語学研究のさらなる実用性について論じた⁽¹⁾。特に、そのような形態と意味との関係を明らかにするには、あくまでも概念的見地から各構成語の結びつきを詳細に見つめ、また、時には、その背後に広がる知識の枠組み、いわゆる「フレーム（FRAME）」をも視野に入れる必要性が生じる。この点、[look down on NP] については、我々の日常生活における視覚経験がその認知定項を算出する FUNCTION となることが導き出された。

その一方で、森山（2018）では、まだ論考されていない問題点が一つ残されたままとなっていた。それは、[cheat on NP] の形態が浮気事象を表示する意味論的見解についてである。議論となっていた箇所を以下(1)として再掲する。

(1) 認知言語学（特に認知意味論）の諸理論を導入する意義とその有用性については、上野・森山（2007）を参照。

- (1) …例えば on。みなさんご存じのこの前置詞，単に「～の上」という日本語で考えてはいませんか？ それじゃ *She looks down on me.*（私を軽視している）とか *She cheated on me.*（彼女が浮気をした）で，なぜ on が使われるかわからないでしょう？ 感覚として取り込まなければ，結局は付け焼き刃に終わってしまうんですよ。

on という前置詞には，「圧力」が感じられることがよくあります。「上に何かが載っていると下にあるモノは圧迫される」，そういうところからでてくる感覚なのですが，これがつかめると，look down on, cheat on だって見えてくる。そう，軽視されたり浮気をされたりするとググッと心に圧力がかかってくるでしょう？ その on なんですよ。

— TOSHIN TIMES on Web, 「憧れの職業を追え！ 言語学者編」
（アクセス日：2015年8月23日）（一部省略・下線筆者）

当該稿では，上記(1)が大西・マクベイ（2006:15）及び大西・マクベイ（2009:93）の見解とも連動していることを挙げ，それらに共通して存在している問題点も既に指摘した。次の(2)として再掲する。

- (2) まず，前者(1) [= 本稿の上記(1)] では，“*She cheated on me.*”を実例として挙げ，「on という前置詞には，『圧力』が感じられることがよくあります。『上に何かが載っていると下にあるモノは圧迫される』，そういうところからでてくる感覚」がそこに反映されていると解釈されている。しかしながら，そもそも，「浮気する」事象が PATIENT に「心理的圧力をかけている」とするならば，“to be unfaithful to your husband, wife, or sexual partner by

secretly having sex with someone else” (*LDCE* (s.v. *cheat on somebody*) (イタリック体筆者)) とする定義上との整合性が成り立たない。「心理的圧力をかけられている」と感じるには、少なくとも、その *PATIENT* が *AGENT* の浮気事象を「既知」とする命題を満たさなければならないからである。また、「*AGENT* が浮気をする = *PATIENT* は心理的圧力を受ける」という等式が成立するのであれば、*cheat* を (*on* が現れないという形態上の対比として) 他動詞で用いた場合には「*AGENT* が騙す = *PATIENT* は心理的圧力を受けない」という等式が同時に存在しなければならないが、少なくとも筆者にはそのような感覚は持ち得ない。

— 森山 (2018: 50) ([] 内表記筆者)

なお、上出(1)や大西・マクベイ (2006: 15), 大西・マクベイ (2009: 93) に示されるような見解は、主に中等教育の学習者を対象としており、厳密さを求める学術研究ではないとする見方も可能であろう。また、複雑な説明より簡易な見方の方が特に初修学習者に都合が良いというケースもあるかもしれない。しかしながら、森山 (2015, 2016, 2018) でも既に検討したように、だからといって特に誤解を与えるような不確かなものを制限なく提供してもよいという論理は成り立たない。それによって、語用能力育成などの今後の学習内容の発展・活用に影響を与えるばかりか、不明瞭な理解（もしくは核心に至らない理解）のまま学習を進めることで対象言語の意味論的特性を把握できず、母語との異同を参照するような言語学習の醍醐味をも失いかねないからである。この点でまさに、言語学的知見の活用は言語教育内容の向上・改善に寄与する照合フィルターとして機能し続けており、語彙概念の捉え方についても、その検討・精査を図るには既存の学習参考書などの見解も論考対象としてとり上げざるを得ない。ただ、

誤解のないように述べておくと、学習者の母語とは異なる構造を持つ学習対象言語に対し、語句の多義性や連語表現の意味のからくりを提示することで、学習者の知的好奇心をも満たそうとする取り組み自体は高く評価されるべきものであると考える。

そこで、本稿では、主に現象学の知見を基盤にした認知意味論の視座から「浮気事象表示において英語動詞 cheat が on を従える意味論的メカニズム」を論考し、語彙概念が如何なる論拠でもって導き出されるべきかという「抽出プロセス」の一端を議論することに主眼が置かれている⁽²⁾。

2. 先行研究の考察

筆者が知る限り、現状、[cheat on NP] の概念そのものを詳細かつ体系的に論考した学術研究は存在していない。たとえば、Okuno (2014) では、英語前置詞 on に関する多義性のメカニズムを明らかにすることを試み、中核概念からの意味変化プロセスに光を当てながら豊富な事例分析がなされているものの、確認される限り、[cheat on NP] に関する事例は掲載さ

(2) 時に「認知言語学研究に歴史的観点は必要ない」とする声を耳にする。しかしながら、言葉は人間の社会文化・文明の発展・変化と共に発達してきたことから、そこに光を当てることは「如何にして外界と関わり合ってきたか」という人間の思考の進化・変化の過程を明らかにすることに他ならない。したがって、現象学（及び情報学）の論拠も踏まえながら、認知言語学（特に認知意味論）の本質があくまでも以下〔1〕であるとするならば、極めて物理的な事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた思考様式の一端を明らかにする上で「歴史的観点」は欠かすことができないと考えられる（詳しくは森山（2008b）を参照）。

〔1〕メタファー論とカテゴリー論の二つを主幹とし、身体活動、知覚器官、さらには社会・文化環境との相互作用を通して得られた「人間の本性の産物（products of human nature）」（cf. Lakoff and Johnson (1980: 118)）を脳内活動の結果事象である言語表現から見つめる認知科学領域研究

れていない。他方、*DELP* や *DEWME* など、近年、語句の多義性やその意義展開を簡潔に示そうとした辞書・辞典も散見されるが、これらも同様に、[cheat on NP] において on が後続する概念的必然性について言及されている直接的記載は見受けられない⁽³⁾。しかしながら、あくまで憶測の範囲であるものの、Okuno (2014) 及び *DELP* では、その意味用法に分類し得る記述は観察される。以下(1)―(2)各々がその記載部分である⁽⁴⁾。

- (1) ON has developed use peculiar to English, examples of which are the following.

- (45) a. I had the door locked *on* them all.
b. “Where did my date go?” “I dunno. Looks like she skipped out *on* you.”

In these examples, the LM is an adversely affected by the events

-
- (3) *DELP* は「一言で述べれば、個々の多義語に中心義を定め、そこから意義展開ボタンに基づいて意義展開を跡づけ、もって意味ネットワークの全体を記述する」(*DELP* (まえがき)) という方法論に則って編纂され、「メタファーなどの意義展開ボタンで多義語を包括的に記述した、初めての辞典」と謳われていることから、先行研究の一つとして扱うに値すると考え、論考を進めた。また、*DEWME* は「本書では語義を「一般義」(最も普通の意味)と「その他」の二つに分けるだけで番号付けはせず、語義全体のつながりをできるだけ物語風に展開した。このようにすることによってある語の語義の全体像をかなり容易に見ることが可能になるのではないかと考えたからである」(*DEWME* (まえがき)) という主旨に則って編纂されていることから、同じく先行研究の一つとして扱うに値すると考え、本論で言及した。
- (4) なお、*DEWME* における on の項目では、「～の上に [の]」を一般義として「近接」、「付着、付属」、「支持、支え」、「時間的接触」、「(空間・時間的な場合以外の接触として) 根拠・基礎・条件・理由あるいは手段・器具」、「動作・状態の進行中・最中」、「運動の方向や目標あるいは動作の直接・観察の対象」、「関係・従事・所属」などへの派生義展開は記述されているものの、確認される限り、いわゆる「不利益」と呼ばれる意味用法に言及する記載は見受けられなかった。

referred to in the predicates. Since adverse effects can be regarded as kind of burden on the one adversely affected, these are extensions from the Burden sense of ON.

— Okuno (2014: 77) (下線筆者)

(2) 3 メタ [特性類似◀0]

〈人・モノ・物事など（の影響が）〉〈人など〉に接して：に影響を与えて [作用して] —an attack on a fortress/ English influence on Japanese…

3—a シネ [類で種◀3]

とくに〈人・物事などが〉〈人〉に悪い影響を与えて —Suddenly the telephone went dead on me./ Her husband walked out on her to live with another woman./ She shut the door on him./ The shop failed when his staff put on him.

— DELP (s.v. on, prep. 3, 3—a) (一部省略筆者)

これらはいわゆる「不利益」(cf. GEJD (s.v. on, prep. 15)) と呼ばれる意味用法に言及していると推察されるが、この知見だけでは「浮気事象表示になぜ [cheat on NP] の形態が用いられるのか」という命題を満たす十分条件には至り難い。その主たる理由として、次の(3 a-b)が挙げられる。

- (3) a. たとえば, DELP (s.v. on, prep.) では、『(人・モノ・物事など（の影響が）〈人など〉に接して』の意義は、影響が人に及ぶことを表す」と記されているが、これをそのまま cheat に適用した場合、第一章(2)と同様の問題が生ずる。この知見に基づくと、「影響が人に及ぶかどうか」という議論に収束してしまい、cheat を (on が現れないという形態上の対比と

して) 他動詞で用いた際には「AGENT が騙す=PATIENT はその影響を受けない」という誤解を生じかねない。しかしながら、以下の実例を見ても、そのような等式が必ずしも常に成立するというわけではない⁽⁵⁾。

- Dale: Yeah. I-I dragged her to every doctor, every test. And after all the surgeries and the chemos, she was ready. She accepted it, you know? But I never could. *And I spent the last few years so angry. I felt so cheated.*

— TV ドラマ *The Walking Dead*, Episode: Wildfire (2010)⁽⁶⁾
(イタリック体筆者)

- Bill: The money, the success, the respect, it was all good for a while, but it never seemed enough. I always want... doubles of everything to make me feel alive, worthwhile inside. And then... it all began to slip away. *I feel cheated. Angry. Always so full of fear.* So I drank... more... and it makes it okay for a while.

— TV ドラマ *My Name is Bill W.* (1989) (イタリック体筆者)

たとえば, cheat を他動詞で用いた場合に「対格名詞句の指示物に影響を与えるかどうかについては無色である」としたとしても, それでは「その影響とは具体的に何か」が議論的

(5) ここでの「影響」を「被行為者の心的状態(ひいては当該者を取り巻く状況)の変化」として捉え, 論を進める。

(6) Film DVD から引用した場合は, その台詞が生起する時間を〈時間・分・秒〉として示す。TVドラマの場合は生起時間を記載しない。以下同様。

にならなければならない。なぜなら、[cheat NP] も NP の指示物に何らかの影響を与えることができるにも拘らず、浮気事象表示には依然として [cheat on NP] の形態が優先されるからである。また、[cheat NP]・[cheat on NP] いずれもが受動態をとることができる (e.g. He was cheated by her. / He was cheated on by her.) ことから明らかなように、両者は共通して「他動性」を持つからこそ、「その影響とは具体的に何か」をより厳密に問う必要がある。

この点、(1)の知見では、「CONTACT → SUPPORT → BURDEN → ADVERSELY AFFECTED」という語彙相における変遷過程の中で記述されているが、BURDEN や ADVERSELY AFFECTED などは派生義の位置づけに相当することに加え、意味論的最大公約数としてはあくまでも CONTACT という単一の概念が on の中核に据えられているとする視点は注目に値する。また、SUPPORT が BURDEN よりも優先されるという点も同様である。しかしながら、*OED*において「不利益」の意味用法に関する項には「SUPPORT → BURDEN → ADVERSELY AFFECTED」と変遷する史的事実が確認されない一方、共時的に見ても、第一章(2)で議論した問題と並行して「心理的圧力」も意味をなさず、そもそも「浮気事象＝(上方向からの)重荷事象」というメタファー認識も常套的ではない。たとえ「ADVERSELY AFFECTE へと意味が完全に転化した認識が [cheat on NP] に反映されている」としたとしても、結局は「不利益の意味用法として用いられることが多い」とする既存の語用論的記述の内に留まり、「接触」概念から如何に当該用法が生じたかという意味論のプロセスについての妥当的説明には至り難い。

- b. 上出(2)に基づき、「接触」概念から「影響」の意味用法へ、そして、そこに「類で種」とするシネクドキの意味縮小的観点を導入したとしても、「不利益」の意味用法にまで至るプロセスには議論の余地が残る。なぜなら、「類」と「種」が結びつくにはそれ相応の理由が存在しているはずであり、「影響」であるからといって突然「不利益」が発生するわけではないからである。事実、下記に示されるように、「非不利益」表示と捉えられる動詞句にも「接触 (IN CONTACT WITH)」概念表示語の on (及び upon) が使用されるケースも観察され、あくまでも「語用論的」に不利益事態を表示する場合が多い、ということが示唆されているに過ぎない⁽⁷⁾。ましてや、[cheat on NP=不利益] としてしまうと、[cheat NP=非不利益] にもなりかねず、結局は、上記 (3 a) と同様、「その影響とは具体的に何か」を問う必要性が生じる。したがって、(紙面の都合上の問題が関連しているのであろうが) 単に「類」と「種」とする観点だけでは十分条件に至らず、より詳細な観察が求められる⁽⁸⁾。

(7) 英語前置詞 upon は up と on との複合体による (cf. *OED* (s.v. upon)) ものであるが、たとえば、“There is a fly *upon* the floor [*upon* the wall / *upon* the ceiling].” と表現可能なことから明らかなように、この「上」とは必ずしも(重力方向による)客観的方向性に基づく空間関係づけとは限らない。つまり、ここでは、「壁」／「天井」の面をあたかも地面や床のように見立て、あくまでも「視点の移動」という認知パターンを交えることによって初めて、TR が各々の LM の「上面」に接触しているという認識的方向性が成立している。なお、英語前置詞 on, upon 各々の概念についてさらに詳しくは森山智浩・高橋・森山オアナ他 (2010: 133-135) を参照。

(8) この捉え方が普遍的認識の一種であるとするならば、他の語句であっても同様の意味変化が再現されているはずである。しかしながら、たとえば、いわゆる「影響」の意を持つ influence が(単一語のまま)「類と種のシネクドキ」を通して「不利益」に関する事物・事象表示に至るような意味変化は、通時的にも共時的にも確認されない。

- The Bride: When *fortune smiles* on something as violent and ugly as revenge, it seems proof like no other, that not only does God exist, you're doing His will.

— 映画 *Kill Bill: Vol 1* (2003) <00:35:22>

(イタリック体筆者)

- Batiatus: Good luck, and may *fortune smile upon*. . . most of you.

— 映画 *Spartacus* (1960) <00:15:27> (イタリック体筆者)

- General Krell: *Lack has smiled on* you today, captain. Consider yourself fortunate.

— 映画 *Star Wars: Clone Wars*, Season 4,

Episode 9: Plan of Dissent <00:43:37> (イタリック体筆者)

以上の理由から、浮気事象を表示する [cheat on NP] における形態と意味との関係を明らかにするには、共時的事例の確認も踏まえつつ、概念的視座から cheat それ自体の史的意味変化、及び、それと共起するに至った on の史的意味変化のプロセスをそこに重ね合わせる空間的捉え方を採用し、両者が結びつく相互関係の背後に如何なる現象学的根拠が存在しているかを詳細に見つめる必要があると考えられる。

そこで、以下ではまず、史的意味論の視点から cheat の意味変化プロセスを観察し、その後、「不利益 (on)」の語用論的定項を生じさせるフレーム仮説の存在を認知言語学の視座から論考する。その目的は、両者の相関関係によって [cheat on NP] の形態が浮気事象を表示するに至った認知メカニズムの実像に光を当てることにある。

3. [cheat on NP] の認知メカニズム

3.1. 英語動詞 cheat の意味変化プロセス

まず, cheat の起源に遡ってみよう。以下(1)に記されるように, 通時的見地に立脚すると, cheat は本来「他動詞」であることが確認される。

- (1) † 1. *trans.* To escheat, confiscate. *Obs.* c1440 Promp, Parv.
73 Chetyn, *confiscor, fisco.*

— *OED* (s.v. cheat, *trans.* 1) (下線筆者)

そして, 次の(2)の社会文化的背景を通して下記(3)の意に至ることとなる。

- (2) 英国の封建法では, 領臣が死亡してしかるべき相続人が無い場合, 封土を国王化領主に返却しなければならなかった。この譲渡を escheat (不動産復帰) と呼んだ。語源はラテン語 ex (外へ) と cadere, cas- (落ちる) からなる後期ラテン語 excadere (外側へ落ちる, …の結果となる) で, 古フランス語 excheoite (偶然起こること) を経て借入された。この escheat から語頭音節消失によって成立した cheat (欺く) は, 権利主張者が, 嘆願にもかかわらず土地を没収された時に感じる, だまし取られたような失望を反映している。

— *DWO* (s.v. cheat)

- (3) 2. To defraud; to deprive *of* by deceit. 1599. SHAKS. *Com. Err.* IV, iii. 79. 1594 — *Rich. III*, I. i. 19 Cheated of Feature by dissembling Nature.

— OED (s.v. cheat, *trans.* 2)

その後、以下(4)に見られる自動詞化の道も歩むこととなるが、cheat の多義性を明らかにする上で注意すべきはその変遷過程にある。

- (4) *intr.* a. To deal fraudulently, practice deceit. 1647 COWLEY
Mistr., Discov. iv, He would cheat for his relief. 1732
BERKELEY *Alciph.* ii. § 20 Cleon. . could cheat at cards.
Mod. Accused of cheating in an examination.
- b. *to cheat on*: to be sexually unfaithful to (one's spouse).
Also without *on. colloq.* (chiefly U.S.). 1934 J. O'HARA
Appointment in Samarra vi. 159 A woman married a louse
that beat her and cheated on her.

— OED (s.v. cheat, *intr.* 4 a - b) (下線筆者)

本来他動詞であったものが自動詞化する主たる要因の一つに「対格名詞句における再帰代名詞の省略」が関わっている場合があることは広く知られた事実であるものの、この捉え方は cheat には適用され得ない⁽⁹⁾。となると、まず考えられることは、わざわざ表現せずとも聞き手（もしくは読み手）への共通理解が得られる「言語の経済性 (ECONOMY IN LANGUAGE)」が関係している可能性についてである。たとえば、次の (5 a - b) の概念的相違、及び、下記(6)の概念を見てみよう。

(9) 詳しくは福森 (2010)、福森 (2011) を参照。

- (5) a. He can play the piano well.
 b. He can play on the piano well.
 (6) He broke [broke up] with his girlfriend last year.

結果から言えば、play も break も本来は「他動詞」(cf. *OED* (s.v. play, break, v.)) であり、それぞれ、以下(7)–(8)のように解釈し得る。

- (7) 上記(5 b)は、たとえば “He can play (Moonlight Sonata) on the piano well.” のように対格名詞句が削除（もしくは省略）されているに過ぎず、前者の(5 a)が「ピアノを弾く」であるのに対し、後者の(5 b)はいわゆる「ピアノで弾く」という「演奏者（厳密には演奏者の指）と鍵盤との接触」様態が前景化されている (cf. Jespersen (1949))⁽¹⁰⁾。
 (8) 上記(6)は、たとえば “He broke [broke up] (the relations) with his girlfriend last year.” のように対格名詞句が削除（もしくは省略）されているに過ぎず、この視座からは、辞書などで散見される「分離」の意味用法として with を捉える必要もない。

このような「言語の経済性」の観点を導入すると、上出(4 a)で見られた [cheat at cards] であれば、その表示事象はたとえば [cheat (the other player(s)) at (the game of) cards] としても捉えられ得る。

しかしながら、上記の観点を活用するだけでは、上出(4 b)の意を表す [cheat on NP] の概念を明らかにするには至らない。その主たる理由

(10) 英語前置詞句との概念的比較・対照も交えた、日本語格助詞「を」及び「で」
 各々の多義性のメカニズムについて詳しくは、上野・森山・福森・李 (2006:
 xvi-xliii) を参照。

として、被行為者を指示する名詞句が本来的に対格名詞句に由来しない (e.g. He cheated on his girlfriend. \Leftrightarrow *He cheated his girlfriend on.) ことが確認される中、[*cheat (the faith / the confidence / the relation) on NP] や [*cheat (the agreement(s)) on [+animate]NP] など、あくまでも on を従える別の対格名詞句の省略を意味論的にも想定し難いこと（もしくは通時的・共時的観点からもそうした事実が確認されないこと）、さらには、“to be sexually unfaithful to (one’s spouse)” というように、前出(1)の中核義とは幾分「離れた」意を表すに至ったプロセスを説明する十分条件になり得ないこと、が挙げられる⁽¹¹⁾。そこで、もう一度、cheat の意味変化を振り返りたい。

前出(1)を原義としながらも、(2)の過程を経ることで、cheat が “to defraud; to deprive of by deceit” の意を表すようになったことは既に観察した。これは、「(行為者が自身の利益を得るために被行為者に) 本当でないことを本当であると思い込ませるによって奪い去る」の概念表示に相当する。そして、次の (9 a-b) に記されるように、この「奪い去る」の意味構成素が取り除かれることによって、いわゆる日本語の「騙す」に相当する DECEIVE の概念を表示し、さらに抽象的移動事象として他動詞移動構文 (CAUSED-MOTION CONSTRUCTION) をも形成する力を有することとなる。

- (9) a. To deceive, impose upon, trick. 1634 MILTON *COMUS* 155 To cheat the eye with bleary illusion.
b. To lead *into* (an action) by deception. 1856 DE QUINCEY *Confess.* 264 He. . could not but find. . himself cheated into

(11) 厳密には “preposition-dative noun phrase” とでも表現すべきであろうが、紙面の都合上、同様の名詞句はすべて「与格名詞句」として表記する。以下同様。

cordial admiration, by the splendor of the verses.

— *OED* (s.v. *cheat trans.* 3 a - b)

そして、この（9 a - b）の変遷過程で発生した意味用法が前出（4 a）の定義である（以下(10)として再掲）。

- (10) To deal fraudulently, practice deceit. 1647 COWLEY *Mistr., Discov.* iv, He would cheat for his relief. 1732 BERKELEY *Alciph.* ii. § 20 Cleon.. could cheat at cards. *Mod.* Accused of chating in an examination.

— *OED* (s.v. *cheat, intr.* 4 a)（下線筆者）

前出(3)の意味用法を示す初出例が1599年である一方、上出（9 a - b）各々のそれを示す初出例が1634年、1856年である。それに対し、上記(10)の初出例が1647年に現れたことを鑑みると、その意味用法に至る直接的出発点は前出(3)としながらも、上出（9 a）とほぼ同時期にその分化発展を遂げてきたとみなし得る。また、上記(10)の下線部に注目すると、前出(3)の概念が“*fraudulently*”へと変化した図地分化（FIGURE / GROUND SEGREGATION）の認識も確認される。そして、上記の流れの中で辿りついた意味用法が前出(4)（以下(11)として再掲）である。

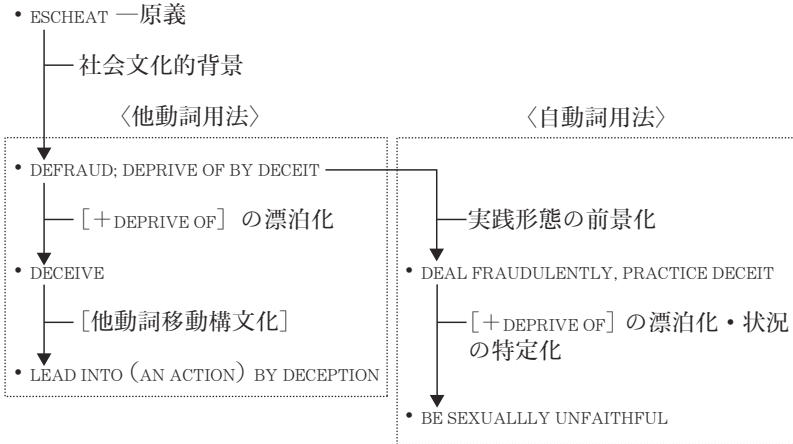
- (11) *to cheat on*: to be sexually unfaithful to (one's spouse). Also without *on. colloq.* (chiefly U.S.). 1934 J. O'HARA *Appointment in Samarra* vi. 159 A woman married a louse that beat her and cheated on her.

— *OED* (s.v. *cheat, intr.* 4 b)

これら史的事実が意味することは以下(12 a - d)であり、その意味変化全体の流れは下図⑬として描かれる。

- (12) a. 「奪うことを目的に騙す (defraud; deprive of by deceit)」 (= (3)) という概念から「目的の非特定化」が進み、「本当でないことを本当であると思込ませる (deceive)」という意味拡大 (GENERALIZATION OF MEANING) を引き起こす (= (9 a))。
- b. 他方、上記 a の意味拡大時 (= (9 a)) とほぼ同時期に自動詞用法 (= (10)) も現れ、その一方で、抽象的移動事象表示としての他動詞移動構文 (= (9 b)) をも形成する力を有するまでに至る。その自動詞化への意味変化過程の中で defraud の指示行為は fraudulently として背景化の道を辿る (= (10))。
- c. その分化過程にあって、前者 a の意味拡大時では [+DEPRIVE OF] の意味素性が漂泊化 (SEMANTIC BLEACHING) される (= (9 a)) 一方、後者 b の自動詞化では「奪うことを目的に騙す」という元の概念が保持されつつもその実践形態 (practice deceit) が前景化されている (= (10))。したがって、その前景化が上記 b の背景化を引き起こし、たとえば “deal fraudulently” と定義されることになる。
- d. そして、その図地分化が進む中、上記 c の漂泊化に比例するが如く、fraudulently における [+DEPRIVE OF] の意味素性が抜け落ちる一方、その不正が配偶者や恋人などの異性に限定される「状況の特定化」に至った (= (11)) と想定される。

(3) 英語動詞 cheat における意味変化プロセス



しかしながら、この意味変化プロセスをもってしてもなお上出(10)から(11)へと至るミッシング・リンクは明らかにならない。「そのような状況の特定化を生み出すためになぜ on を共起させなければならないのか」という問いに応じるだけの十分な論理が依然として得られていないからである。[cheat on NP] が浮気事象を表示するに至った認知メカニズムの実像を明らかにするには、「不利益 (on)」を生じさせるトリガーとしてのフレームを見つめ、本節における意味変化の知見をそこに交えることが求められよう。

3.2. 「接触」概念から「不利益」の意味用法を生み出す身体性のメカニズム

3.2.1. 「衝突移動による接触」に基づくフレーム仮説

本節では、まず、[cheat on NP] における on の意味用法が以下(1)の範疇に収まり得ると考え、論を進める。

(1) CAUSING SOMEBODY PROBLEMS

used when something bad happens to you, for example when something you are using suddenly stops working, or someone you have a relationship with suddenly leaves you:

Suddenly the telephone went dead on me.

Dorothy's first husband walked out on her.

— *LDCE* (s.v. on, *prep.* 30)

この意味用法はいわゆる「不利益の on」(cf. *GEJD* (s.v. on, *prep.* 15)) と呼ばれるものであるが、特に注意すべくは、on それ自体に不利益の概念が包含されているわけではない、ということである。確かに、辞書定義の一つとしてこうした意味用法を設けることはその語用を知る上で非常に重要な位置づけを成すが、その因果はあくまでも、共起語句との関連によって生み出される語用分類上の定義づけによっていることは言を俟たない。事実、第一章(3 b) 内の実例(以下(2 a-b) として再掲)でも観察したように、不利益とは真逆の事例に見なし得る動詞句にも on (もしくは upon) が用いられることがその証左の一つとなる。

- (2) a. The Bride: When fortune *smiles on* something as violent and ugly as revenge, it seems proof like no other, that not only does God exist, you're doing His will.

— 映画 *Kill Bill: Vol 1* (2003) <00:35:22> (イタリック体筆者)

- b. Batiatus: Good luck, and may fortune *smile upon*... most of you.

— 映画 *Spartacus* (1960) <00:15:27> (イタリック体筆者)

その一方で、「不利益」の意味用法として確立されるにはそれ相応の使用頻度の多さが関係しているのだから、当然、「接触」概念を起点としてそこに至りやすい何らかのプロセスが存在しているに違いない。つまり、第一章（3 b）でも既に指摘したように、「対象物への物理的接触」から「対象物への抽象的接触」への意味変化は生じたにせよ、与格名詞句指示物に「影響」を及ぼすには「抽象的接触」が必要であるからといって突然「悪影響；不利益」が生み出されるわけではないはずである。やはり、on の中核概念が或るプロセスを経ることで「不利益」の意味用法に結びつきやすく、ひいては、そのプロセスが cheat の概念と相まって 3.1 (11) の意を表示するまでに至った、と考えるのが妥当であろう。そこで、そのミッシング・リンクを埋めるべく、次の(3)に注目する。

- (3) English *on* in its central sense is a composite of *above, in contact with, and supported by*. Each of these is an elementary spatial relation.

— Lakoff and Johnson (1999: 31)

上記(3)は on の中核が複合概念で形成されているとする認知意味論的捉え方である¹²⁾。このアプローチ方法に基づくと、次の（4 a-b）が表す事象

(12) このような捉え方とは異なる種類の複合概念で on の多義性を記述しようとする試みも散見される。たとえば、本論第一章で観察した DELP における on の項目には、「研究ノート」として以下 [1] が記載されている。

[1] Lindstromberg (1997) によると、on にはまったく異なる 2 つの literal meaning がある。1 つは off の反対、もう 1 つは back の反対の意義で、前者は “contact with a surface”，後者は “continuation of movement” の意義に相当すると述べる。

— DELP (s.v. on, prep.)

しかしながら、主に次の [2 a-b] の点で、本論の視座とは異にする。↗

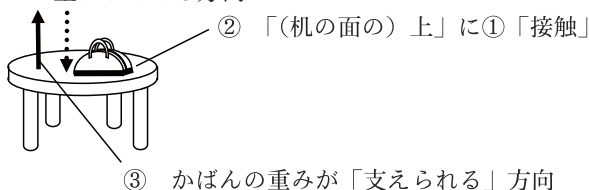
はそれぞれ、下図（5 a-b）のような認識で捉えられていることになる。

(4) a. That heavy bag was *on* the desk.

b. He leaned *on* the wall.

— 上野・森山・福森・李 (2006: 717)

(5) a. かばんの重みがかかる方向



↘ [2] a. ONE FORM, ONE MEANING (cf. Bolinger (1977)) の知見に則り、互いに何ら関係性を持たない複数の異なる意味が同等の位置づけで単一の形態に収まっている立場をとらない。

b. たとえ上記 a の知見を取り入れなかったとしても、[1] の捉え方には疑問が残る。下記にその問題点を簡潔に列挙する。

- 概念上、back と continuation of movement 各々が指示する事象は正反対の位置づけにはならない。いわゆる「後方」への移動であったとしてもそこに連続性が見出される場合は、continuation of movement となり得る。
- ここで言う continuation of movement は literal meaning ではなく interpretation であると考えられる。そうした「解釈」を発生させているのはその背後に存在する「時の流れ」のフレームによるものであり、on それ自体の中核として包含されている概念ではないと考えられる（より詳しくは森山智浩・高橋紀穂・森山オアナ他 (2010: 133) 参照）。
- さらに、この continuation of movement を「TR の前方への移動；連続性」と見なしたとしても、たとえば “We retreated on from Cheat River through Maryland and on to a small place called Greenland...” (150 Years Ago Today (アクセス：2016年3月4日) (イタリック体・一部省略筆者)) のような事例では、その空間関係づけとの整合が成立し難い。

- b.
-
- ③ 体重の重みを「支える」方向
- 上野・森山・福森・李 (2006: 717) (一部変更筆者)

第一章(1)の見解に比例するが如く、確かに、現実世界では、各々、THEMEの指示物の「(物理的) 重み」が LANDMARK のそれにかかっていることは疑いようがない。しかしながら、ここで on が用いられている限り、言語認識の世界では、その「重み」とは SUPPORTED BY (支えられて) の前提条件にしか過ぎず、簡潔に言えば、その重みによる THEME の運動が LANDMARK による同じ力学量でもって「拮抗」していることに焦点が当たる概念化で捉えられている⁽³⁾。なお、“The village is located *on* the lake.” といった事例を挙げるまでもなく、上述(3)における複合概念の中でも、[IN CONTACT WITH] がその最たる中核を担う。

(3) Beitel, Gibbs and Sanders (2001) では、SUPPORT, PRESSURE, CONSTRAINT, COVERING, VISIBILITY の5つのイメージ・スキーマでもって on の多義性を記述しようと試みられている。しかしながら、すでに本論で観察したように、このうち少なくとも PRESSURE に関する概念はその多義性の意味論的最大公約数に相当するものではなく、したがって、on 自体の中核概念と対等に語られ得る意味要素とは捉え難い。さらに、本論でも既に観察したように、PRESSURE は SUPPORT の前提条件として「(連続体としての) 現実世界」の中に位置づけられるものであり、on が描く「(非連続体としての) 言語世界」の認識とは切り離されるべき問題であると考えられる。事実、たとえば “A heavy stone / a feather fell *on* the ground before me.” のいずれの事象表示に on を用いても容認可能であり、後者の発話者／観察者が (TR による) LM への圧力認識を前景化させているように筆者には感じられない。“Look at a picture *on* the wall.” といった事例についても (たとえそこに視点の移動が反映されているように) 同様である。それ故、英語前置詞 on の中核には一貫して [IN CONTACT WITH] という単一の概念が据えられていると考え、論を進める。

以上の見解を前出(1)に組み合わせると、まず、何らかの「影響；作用」が対象者に及ぶマーカーとして「接触」概念表示語 *on* がその姿を現していると考えられる。しかしながら、3.1.(3)の自動詞化に至るプロセスにおいて「実践形態の前景化」及び「[+DEPRIVE OF] の漂泊化」を伴うからといって、*on* の出現理由を単に「影響；作用」が関係しているとするだけではその十分条件を満たさないことは既に述べた。それだけでは3.1.(9)のいわゆる *DECEIVE* の概念表示であっても対象者にその影響が与えられることが容易に想像されるにも拘わらず、自動詞化の兆候が通時的にも共時的にも観察されず、さらには、3.1.(11)に見られる「不利益状況の特定化」表示へと変化したプロセスにも妥当な説明を与え難いからである。

以上の問題提起に対して、上記(3)―(5)の枠組みの中での解決策を探るために、下記(6)の学術的知見に注目する。

(6) 23. 運動、方向の *on*

On は接触、接近の意より、そういう位置に動く運動や方向を示し、更に動作の目的や、直接または間接の対象をあらわす。...

N. B. (i) *Turn on* と *turn to*: この両者の行為は同じであるが、心持が違う。*turn to* は無色であるが、*turn on* は COD に *face hostilely, become hostile to* とあるように、「敵意を持つ（て向き直る）」のが普通である。そして OED に *to change one's position to assail suddenly or violently (in act or word)* とあるように、*suddenness of movement* の観念が含まれている...

Mr. Warburton *turned on* him, white with anger. — Maugham, *The Outstation*（ウォーバトン氏は彼にきっと向き直った。怒りで顔を眞青にして）/ One hog *turned on* Lonnie and snapped at him. — Caldwell, *Kneel to the Rising Sun*（1頭の豚が急にロニーに向かっ

て囁みついてきた)

— 小西 (1955: 60-61) (一部省略筆者)

ここでは、「接触」概念から派生した「運動・方向」の意味用法の枠組みにおいて、turn to と turn on との対照を題材に [+SUDDEN] の解釈が on に生じる言語現象が扱われている。そして、以下(7)の歴史的事実から、この「接触」から [+SUDDEN] の解釈へと至る意味変化のトリガーには「衝突 (INTO COLLISION WITH)」認識が関与していることが観察される。

- (7) Into contact or collision with, esp. in the way of attack; against, towards.

c.893 K. ÆLFRED *OROS.* II. V. § 2 Æfter þæm he won on Scippie.

— *OED* (s.v. on, *prep.* 15)

つまり、「接触→(接触位置への)運動・方向－[衝突]→[+SUDDEN]」の意味変化が引き起こされた結果、上出(6)における to change one's position to assail suddenly or violently (in act or word)' に至ることは、前出(1)の定義内で “suddenly” が用いられている事実とも並行する。さらには、次の (8 a-b) に示されるように、同認識が異言語間にまたがって存在する再現性を鑑みることで、人間という同じ生物としての身体経験にその拡張基盤を置く概念化であるとみなすこともできる。

- (8) a. (本来は突進する意) 不意すぎて不自然なさま。だしぬけ。

突然。「一に切り出す」「一な発言」「一の感」

— 『広辞苑』(s.v. とう-とつ【唐突】)(下線筆者)

- b. 唐突は「突き当たる」を意味する漢語に由来する。唐突の語

源は、唐の国が突然何かをしたからと考えられることもあるが、原義が「突き当たる」であるから、「不意」の意味で国名と絡めて考えることは出来ない。

—『語源由来辞典』(s.v. 唐突) (アクセス：2018年9月17日)

(下線筆者)

しかしながら、このような意味変化の結実だけでは、依然、「浮気事象表示に英語動詞 cheat が on を従える概念的理^由」を説明するだけの十分条件には至らない。なぜなら、[+SUDDEN]の意味素性を言語化した“suddenly”は本来的に「不利益事象」表示だけに拘束される語ではないこと、つまり[±DISADVANTAGEOUS]としての無色の語であることから明らかなように、「突然性」というだけでは「不利益」志向の認識を生じさせるだけのトリガーになり得ないからである。

3.2.2. 「仕向け移動による接触」に基づくフレーム仮説

3.2.2.1. 「犠牲」の接触認識

3.2.1.では、「衝突」事象を通した「接触」概念が「突然性 [+SUDDEN]」の解釈を生む認識プロセスを観察した。同時に、そのプロセスだけでは[cheat on NP]における形態と意味の結びつきを明らかにし、かつ、「不利益」と呼ばれる他事例の意味用法との整合性・体系化を図る上での必要条件にはなり得たとしても十分条件には至らない問題点も指摘した。

そこで、その十分条件に至らしめるトリガーの実像を明らかにするために、英語前置詞 on が持つ「不利益」の意味用法それ自体に深くメスを入れた以下(1)の学術的知見に光を当ててみよう。

- (1) On=against or at the expense of : 上例の中にはアメリカ英語の

a joke on me (私にあてつけの冗談) の on に見るような、「損害を與える」, 「迷惑をかける」, 「権利を害する」等の意味をあらわしているものもあるが, 英國ではその使用は限られているようである。これに反して、アイルランド及びアメリカ英語においては、その使用範囲は実に廣く、且つ自由に用いられている。Curme は Every three years he's raised the rent *on* us.—Basil King, *The Side of the Angels* / He shut the door *on* me (in older English, also *to me* or the simple dative) などの例を挙げ、'The development here from the dative to the preposition on (=against) indicates the desire for a clearer expression of the idea of disadvantage, injury. On account of its distinctive form the *on*-dative is spreading in this meaning in colloquial speech. It is especially common in popular Irish English, which at this point is doubtless influencing American colloquial usage.' (Syntax p. 107) と言っている。

He's after dying *on me*—Synge, *The Shadow of the Glen* (彼は私を残して死んでしまった [困ったことには]) / My road is lost —*on me*.—Id., *The Well of the Saints* (私は道に迷って困っている) / They sure worked out *on* your head. I thought you was gone. —Steinbeck, *The Long Valley* (本当に奴らはおまえの頭をさんざなぐりつけやがった。お前が参ってしまったかと思ったよ) / She explained how a dog would—do things *on* the plants of her garden, or even dig in her flower bed.—*Ibid.* (彼女は犬が庭の植木にいろいろのことをし、彼女の花壇を掘るようなこともするんですよと話した) / "Well," the lady said, "if he were my boy, I'd have the police *on* you in two minutes." —Saroyan, *The Human*

Comedy (「うちの子供だったらすぐ警察を指し向けますよ」と婦人は言った) / I just couldn't walk out *on* the President.—*Woman of the Year* [映画台本] (どうも大統領から逃げ出すことができなかったんだ)

この *on* は *on top of* となって強められることがある…。アイランド英語に多い。

Let me go, or I'll scream, an' then you'll have the *oul' fella on top of us*.—O'Casey, *Juno and the Paycock* (放してください、放さないと大声を出しますよ、するととうちゃんが来ますよ) [*oul' fella*=old fellow] / For God's sake speak easy, an' don't bring them in here *on top of us* again.—Id., *The Shadow of a Gunman* (後生だから静かに話してください。そして皆をまたここに寄せないでください)

— 小西 (1955: 62-63) (下線・一部省略筆者)

上記(1)は半世紀以上も前に記述された研究成果であるものの、今もってなおその説得力は色褪せていない。特に、本稿の論題に関係する記述内容について、そこから読み取ることができる知見を次の(2 a-b)としてまとめる。

- (2) a. アメリカ英語の a joke *on* me (私にあてつけの冗談) に見られるような「損害を與える」, 「迷惑をかける」, 「権利を害する」等の意味を表す *on* は [+DISADVANTAGEOUS] として解釈される。
- b. 本記載は「運動, 方向の *on*」の項に含まれていること、また、上記(2 a)における a joke *on* me は「当てつけ」とし

て「抽象的移動」の範疇に収まり得ることなどを鑑みると、そのメタファー的拡張基盤となる根源領域の「具象的移動」が顕著に表されている事例の一つとして、上記(1)の中では
“Well,” the lady said, “if he were my boy, I’d have the police
on you in two minutes.” が挙げられる。

これらの知見を踏まえた上で、「不利益」の意味用法に至る on の史的変遷を詳細に見つめていく。

まず、英語史に初めて「不利益」の意味用法が現れたことを示す記述が下記(3)である。

- (3) To the disadvantage or detriment of (a person); so as to affect or disturb. *colloq.*

1880 W. H. PATTERSON *Gloss. Words Antrim & Down* 74 ‘Don’t break it on me,’ *i.e.* don’t break that thing of mine.

— *OED* (s.v. on, *prep.* 20 f)

ここでは、“don’t break that thing of mine” と意識され、「所有」への意味解釈を通して本来の「接触」概念の名残が感じられるものの、“disadvantage” が定義内で用いられていること、また、本定義が“Of motion or direction towards a position” という範疇内に収められていることから、上記(2 a-b)の見解とは齟齬が生じない。

また、*OED* では同範疇内に20 dとして次の(4)を掲載していることが、上出(2 b)におけるメタファー的解釈が妥当であることを物語っている。

- (4) Of a joke, laugh, etc.: against or at the expense of (someone)

1866 *Harper's Mag.* July 271/2 There may be a joke about it; but if there is, it is on the Colonel, for he told me so.

— *OED* (s.v. on, *prep.* 20 d)

そして、上出③にまで至る意味用法の移り変わりとして、下記⑤の史的変遷が観察される。

- (5) Indicating the person or thing to which action, feeling, etc. is directed, or that is affected by it. In the const. of many verbs and phrases.
- b. Indicating the object of desire and the like. In the construction of *eager, keen, mad* († *amorous, enamoured, fond*), *bent, determined, set, gone*, etc.
 - c. Indicating the bank, banker, or person to whom a cheque or draft is directed, and by whom it is payable. in *to draw on, a cheque*, etc. (*drawn*) *on*.
 - d. Of a joke, laugh, etc.: against or at the expense of (someone)
 - e. Indicating a person, etc., who is to pay the bill, esp. for a treat of any kind. *colloq.*
 - f. To the disadvantage or detriment of (a person); so as to affect or disturb. *colloq.*

— *OED* (s.v. on, *prep.* 20)

これら意味変化の変遷は史的「事実」であり、現代英語の観点からたとえその中に廃義・廃語が含まれていたとしてもそれを理由に共時的な視座の

みの導入がその優位性を保つことには至らない。通時的視座を持たずに一単語内の多義性を構築しようとする、その成果の「実在」が検証し難く、また、或る派生義に至るまでの過程に廃義が存在する場合であっても、それを考慮せずに意味変化のプロセスを構築しようとする恣意的な要素もそこに包含される可能性を孕むからである。もちろん、史的観点を併せて導入したからといっても、その分析には何らかの「解釈」を適用せざるを得ないことから、主観的見解を完全に排除できるとは限らない。しかしながら、たとえそのような場合であったとしても、導き出された成果を実証する上での根拠としてあくまでも「事実を辿る」ことがその基盤となることに何ら変わりはない。このような理念を踏まえた上で上記(5)の史的事実から「不利益」の意味用法を生む認知プロセスを導き出そうとするのであれば、着目すべき主たる点は以下(6 a-c)であると考えられる。

- (6) a. 「与格名詞句指示物との『接触』位置への移動・方向」概念の範疇に収まる。
- b. その範疇の中でも「動作や感情などが与格名詞句指示物に『仕向けられる』」認識に基づく。
- c. 上記(5 c)から、その仕向けられるものが「履行すべき(小切手や為替手形などの)金銭債務」に関わるものへと意味縮小を引き起こした。その後、(5 e)の意味用法が生じている。

この(6 a-c)の変遷の直後に上記(5 f)の意味用法が生じたことを考えれば、そのミッシング・リンクの背後には「金銭債務の履行；支払い」志向から「(必ずしも金銭債務に関わらない) 責務履行」志向へと意味拡大を引き起こした認識が存在しているに違いない。ただし、ここでの「債

務」認識には注意を要する。そもそも、「債務」とは「債権に対応する債務者の義務。金銭を借りた者が貸し手に対してそれを返済しなくてはならない義務など」(cf.『明鏡国語辞典』(s.v. さい-む【債務】))を指す。しかしながら、上記(5 f)に至る直前の意味用法である(5 e)では、その初出例とそれに続く実例として、それぞれ、次の(7 a-b)が挙げられており、いわゆる通常の債務とはその様相を異にしていることが確認される。

(7) a. 1871 *Republican Rev.* (Albuquerque, New Mexico) 29 July
2/4 After the first round they said it was on me'.

b. 1902 C. J. C. HYNÉ *Mr. Horrocks, Purser 78* And now come and
have a bit of cheap lunch. We'll consider we've tossed for
it, and it's on me.

— OED (s.v. on. *prep.* 20 e)

ここで示されている意味用法は、下記(8)にも観察される、現代英語におけるいわゆる「負担」の意味用法 (cf. *GEJD* (s.v. on, *prep.* 16)) に相当する⁽⁴⁾。

(4) ここでの「負担」とはあくまでも辞書分類における意味用法としての語用定義であり、そこには依然として被接触行為から得られる我々の日常経験が生きていることについて詳しくは本節にて後述。なお、[cheat on NP]におけるonの意味用法が「重荷 (BURDEN)」概念に端を発する不利益であるとするならば、以下 [1] — [2] は同一事象を指示する上で交換可能とならなければならないはずである。

[1] He cheated on his girlfriend.

[2] *He put his cheat on [upon] his girlfriend.

しかしながら、上記 [1] の事象は cheat を名詞化して組み立てた [2] では表し得ないばかりか、その容認度の差からも (言語世界における)「重荷」概念がそこに反映されていないことが改めて確認される。

(8) Clone: Broadside, if we make it through this one, *drinks are on me*.

— 映画 *Star Wars: the Clone Wars*, Season 1, Episode 3:

Shadow of Malevolence <00:08:08>

(イタリック体筆者)

つまり、本来の「個別単位」の債務とは異なり、「自身の消費量・受領量以上（すなわち他者の分も含めた総量）の履行債務」を表す意味用法を通して上記（5 e）が生じているのだから、「通常ではその履行の引き受けが想定／期待されていない責務・犠牲」が与格名詞句指示物に仕向けられることになる。他方、以下(9)に示されるように、事実を隠したり歪めたりしていることは同様であっても、[cheat NP] の形態では、対格名詞句の指示物に必ずしも「本来的に払う想定がなされていない犠牲」を強いらなければならないというわけではない。

(9) Suddenly, I'm longing for the fragrance of floral notes, pining for those bewitching perfumes pervading bounteous gardens. Hankerings for hot chocolate and cinnamon laced apple tarts are long gone replaced entirely by a reverie of Spring and all the floral joy it so mercifully brings with it. They implore me to suffuse my desserts with a hint of that flower-laden aroma. Perhaps it is an attempt to *cheat myself, into believing that the season of wind and frost has made its journey south, leaving us, Northerners, with warm, languid breezes, the murmurs of lush trees and sweet scented hugs.*

— *Travel / Food / Art* (アクセス：2018年 9 月24日)

(イタリック体筆者)

したがって、上出（5 d）では“at the expense of”の意味用法としてその姿が定義上に顕在化していることから明らかなように、「与格名詞句指示物に接触するように（与格名詞句指示物から見て本来的に払う想定がなされていない）犠牲を仕向ける；犠牲を強いる」という認識が、いわゆる「不利益」と呼ばれる意味用法の実像に値すると考えられる⁽⁴⁵⁾。

同様の概念化は、被接触行為から得られる我々の日常経験とも矛盾しない。そもそも、「一次元／二次元的場所への接触（on）」概念と対義をなすのが「一次元／二次元的場所からの分離（off）」概念である。換言すれば、こうした「接触物と被接触物」の関係は、本来、両者が「分離」していることを前提としている。この前提条件を「不利益」の意味用法に適用すると、そのルーツとなった為替手形にせよ勘定の支払いにせよ、与格名詞指示物にとっては通常「引き剥がしておきたい；引き離しておきたい」対象物であることは言を俟たない。「支払いを押し付ける」など日本語におい

(45) 本論 3.2.2.1 (1)では、「不利益」の意味用法を持つ on が“on top of”として表され、その意が強調される場合があるとされている。ただし、次の [1 a-b] に示されるように、「不利益」の意味用法と呼ばれる on のすべてが“on top of”に置き換え可能というわけではなく、そこには或る種の意味論的制限がかかっていると捉えざるを得ない。

[1] a. He $\left\{ \begin{array}{l} \text{walked out on} \\ * \text{walked out on top of} \end{array} \right\}$ his family.
 b. Don't $\left\{ \begin{array}{l} \text{give up on} \\ * \text{give up on top of} \end{array} \right\}$ me.

結論から言えば、ここでの意味論的制限とは、下記 [2] への意味変化をもたらす“HAVING CONTROL OR FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL OR FORCE IS DOWN”という方向づけのメタファーが機能する場合に限る、と考えられる。

[2] in control of a situation

Do you think he's really on top of his job ?

Work tends to pile up if I don't keep on top of it.

— OALD (s.v. on top of something/somebody, 4)

でも並行するが如く、相手の想定にそぐわない犠牲をもたらす事象・事物を与格名詞指示物にまで移動させるには「接触」に至るしめるほどの概念化が必要であった一方、「仕向ける」概念化が根源領域になっているとはいえども「到達点 (GOAL POINT)」概念表示語の to ではその代用になり得なかったと考えられる。事実、債務概念起点表現ではないものの、「責任を被(かぶ)る」, 「自身の罪を人になすりつける」などでも「犠牲; 損害」を受ける事象表示には「接触」概念が適用されており、いずれも「触覚」を通した身体経験がその概念拡張の基盤となっていることが観察される。このような認識が顕著に言語化された一例が次の(10)であり、

- (10) Christopher: My parents got divorced. Early and ugly. My mum was nuts so I lived with my dad. We used to play a father / son games. *Pin the blame on me*, rock, paper, get me another beer, casino night.

— TV ドラマ *Titus*, Episode: The Reconciliation (2000)

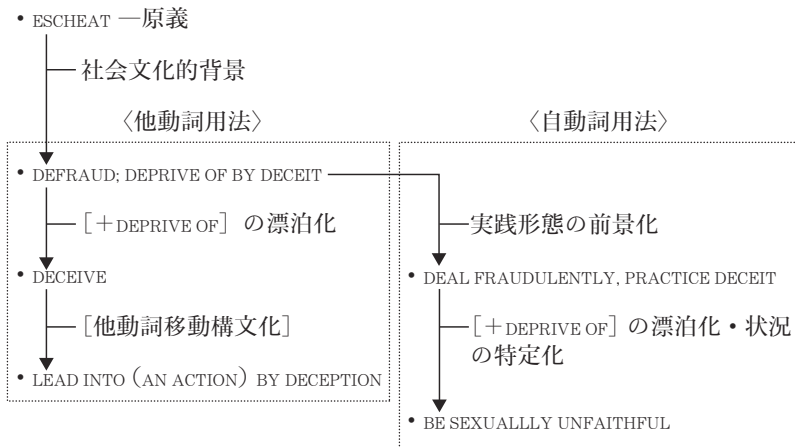
(イタリック体筆者)

ここでは、“blame”の指示物が「引き剥れない; 引き離れない」ように固定するために「留め針」による「接触」認識が活用されている。史的事実の変遷過程でもその存在が認められなかったように、「不利益」の事象・事物が対象者への負担に感じられるからといって、必ずしも「SUPPORT → BURDEN → ADVERSELY AFFECTED」といった「重荷」事象だけが同概念化の要件を満たす唯一的な根源領域として位置づけられるわけではないことがここでも確認されよう。

3.2.2.2. 「犠牲」認識における「前提」の存在

3.2.2.1. では、「接触位置への運動・方向」の概念範疇において、与格名詞句指示物に「仕向ける」対象物が「履行すべき金銭債務」に意味拡大を起こす一方、その履行対象が、いわゆる現代英語の「負担」の意味用法に相当する「通常ではその履行の引き受けがなされようとしないう務の押し付け」のプロセスを経て、「与格名詞句指示物に接触するように（本来的に払う想定がなされていない）犠牲を仕向ける；犠牲を強いる」という認識に変化していく「不利益」の生成プロセスを導き出した。史的意味論の観点から英語動詞 cheat の意味変化を見つめた3.1.の論考内容も含め、これまでの議論を通して得られた認知プロセスを以下(1)―(2)として簡潔に示す。

(1) 英語動詞 cheat における意味変化プロセス



(2) 「接触」概念表示語 on に「不利益」の意味用法をもたらす現象学的フレーム

- ・物理的「接触 (IN CONTACT WITH)」概念

↓
「接触」位置への移動・方向＋抽象的「接触」概念

- ・意味用法：「動作や感情などを仕向ける」

↓
意味縮小：「仕向け対象：履行すべき金銭債務」

- ・意味用法：「為替手形などを仕向ける」

- ・意味用法：「勘定の支払いなどを仕向ける」

↓
意味拡大：「履行対象：通常の想定・期待とは相反する犠牲」

- ・意味用法：「(本来的に払う想定がなされていない) 犠牲を仕向ける；
犠牲を強いる」

本稿の最大の論点は、3.1.(10)から(11)へと至る動機づけについてであり、「そのような状況の特定化を生み出すためになぜ on を共起させなければならないのか」という問いに応じるだけの十分な論理が得られていないことであった。このミッシング・リンクを埋める役割を果たすのが上記(2)の現象学的フレームである。つまり、上記(1)における自動詞用法内の意味変化のプロセスに(2)の現象学的フレームを代入することによって、浮気事象表示の [cheat on NP] の概念が定められることになる。

そして、「不利益」の意味用法、ひいては [cheat on NP] のさらなる実像に迫る上で特に注意すべきことは、3.2.2.1.でも観察したように、ここでの「犠牲」が通常の（自身が消費／授受した範囲内の）債務履行によるものではなく、上述した「通常の想定・期待とは相反する犠牲」から生じたことにある。この認識が成立するには、「(与格名詞句指示物による) 本来的な想定」が前提として存在してなければならないことは言を俟たない。また、そうした想定は、相反する犠牲が仕向けられるということが与

格名詞句指示物にとって必然的に「想定外」に関わる [+SUDDEN] の特性も帯び始めるという点で、3.2.1.の論考内容に相通ずる。さらに、前出(5f)の直後に“Indicating a person or thing to which hostile action is directed: against” (OED (s.v. on, prep. 21)) の意味用法が生じたこともここに加味すれば、「想定外」に関わる [+SUDDEN] の特性が3.2.1.(6)で見られた意味用法としてその姿を現していると考えられる。

このような『想定内』と『想定外』の対立¹⁰⁶の認識に光を当てれば、英語前置詞 on が持つ「不利益」の意味用法の実像がさらに浮き彫りになる。繰り返しとなるが、その前提には必ず、与格名詞句指示物による何らかの「想定」が存在していると捉えられ得るからである。もちろん、如何なる文であれ、その命題が真である限りは、(発話者と与格名詞指示物との違いはあれども)その多くには何らかの「想定」がその前提として機能している。しかしながら、与格名詞句の指示物の視点から「(本来的に払う想定がなされていない)犠牲が仕向けられる；犠牲が強いられる」ということは、必然的に「期待していない [+UNEXPECTED]」事態が生じているということになる。この背景には、「そうして欲しくない」もしくは「そうなって欲しくない」という与格名詞句指示物の一種の心的態度がその前提(PRESUPPOSITION)となっており、故に、この状況では「或る期待の範疇」が密接に関わっているとも言い換えられる¹⁰⁷。こうした経験のゲシュ

(106) 以下[1]に示されるように、GEJDでは、この「不利益」の意味用法に関する事例によっては、againstと置き換え可能な場合も存在していることが示唆されている。

[1] They have some evidence on [against] me.

彼らは私に不利な証拠を握っている

— GEJD (s.v. on, prep. 15)

これは、(与格名詞句指示物から見た)『或る期待の範疇』に相反する犠牲を仕向ける」という概念が「不利益」の on として姿を現していると捉えられる。他方、against が用いられる場合は、たとえば与格名詞句の指示物が自身に有利となるような証拠や証言などを「先に」出しており、それに「対抗する」事

タルト (EXPERIENTIAL GESTALT) を [cheat on NP] における「状況の特定化」へのプロセスに適用した場合、「或る期待の範疇」とは、当然、配偶者・恋人などへの「忠実さ」を求める心的態度となろう。次の(3)がその典型的認識を表す事例の一つとなる。

- (3) Dr. Isobel: You don't talk to bastards who *cheat on their girlfriends*, George. *That's the rule. You weren't officially his girlfriend.*

— TV ドラマ *Grey's Anatomy*, Episode : Owner of a Lonely Heart (2005) (イタリック体筆者)

まさに、cheat の行為遂行に伴い、「与格名詞句の指示物に接触するように『(与格名詞句指示物から見た) 或る想定・期待の範疇』に相反する cheat の指示事象を仕向ける」という同概念化を通して [BE SEXUALLY UNFAITHFUL] の意が [cheat on NP] の形態によって具現化されていると考えられるのである⁽¹⁷⁾。

↘象として表現されていると考えられる。なお、浮気事象表示に [*cheat against NP] の形態が用いられないのも同様の理由に依っており、本論第一章(2)でも観察したように、そもそも与格名詞指示物に “secretly” に行うことをプロトタイプとする同事象に「対抗」概念が入り込む余地はない。

(17) 本論 3.2.2.2. の論考内容は、以下 [1] の見解とも矛盾しない。

[1] 他動詞と「自動詞+on」との相違: on は we settled it (それを解決した) と we settled on it (それについて解決した, それに決めた) とに見られるように、動詞の目的語に及ぼす直接性を少なくすることがある [Bøgholm]。これは know it と know of it や, joke here と joke with her との関係に似ている…。

— 小西 (1955: 59) (一部省略筆者)

なぜなら、同節(2)図内における BE SEXUALLY UNFAITHFUL への変化に伴い、[+DEFRAUD] の概念が様態概念と移り変わり、さらにそこから [+DEPRIVE OF] の概念が消失したという点で、他動詞 cheat がその対格名詞句に及ぼす↗

このような「([cheat on NP] における NP の指示物の視点を通した) 或る想定・期待の範疇に相反する事象生起」の認識が存在していることへのさらなる妥当性は、「不利益の on」を用いた他の表現群においても同様の認識パターンが再現されることによって担保される⁽⁸⁾。下記(4 a-d)と

ゝ直接性よりも「弱い」と考えられるからである。なお、上記[1]は認知意味論で言う CLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECT (cf. Lakoff and Johnson (1980: 128)) という比喩のフィルターを通した捉え方とも並行し、通時的には本来他動詞であった cheat が自動詞化したことで対格名詞句が与格名詞句に変わり、その名詞句への cheat の影響力が弱まった結果、中核義と異なる意味を帯びようになった、と解釈することも可能かもしれない。確かに、統語と意味の接点を見つめる上で否定できない捉え方ではあるものの、他動詞化から自動詞化への同メタファーの活用には、自動詞化に伴う出現前置詞の概念が本来的にその動詞における意味概念構造の中に包含されていることがプロトタイプの前提条件になると考えられる(詳しくは森山(2015)参照)。ひいては、たとえば上記[1]における[know of NP]は[know (SOMETHING) of NP]という「部分(something)―全体(NP)」の概念表示の形態に由来することなど、間接性を表すからといってその前置詞選択が任意に行われるわけではなく、そこには何らかの必然的な要因が存在していると言える。以上の理由から、本論では、影響力の強弱は念頭に置きつつも、単に「自動詞化することで影響が弱くなった結果、意味変化が生じた」とする立場だけで論を進めるような方法論を採用していない。

- (8) 言葉を換えると、本論3.1.(10)から(11)へと「状況の特定化」を引き起こした要因には、たとえば“My husband cheated me (out of money).”のように、たとえ夫婦関係に他動詞 cheat を用いても、それが必ずしも浮気事象のみに限定して表示されるわけではないという言語の経済性が関与していると考えられる。そこで、『『本来的に引き離しておきたい事物・事象が仕向けられる』』ということはその前提として『(与格名詞句指示物の) 或る種の期待が存在している』』とする「不利益」の on を用いることにより、浮気事象の前提となる「夫婦間／恋人間の期待のプロトタイプの範疇」を喚起させることになる(なお、上記例文事象の前提となる「お金をだまし取らない」とするようなことは何も夫婦間／恋人間に限ったことではなく、また、たとえ夫婦間／恋人間に絞ったとしても、そうした行為はそもそも夫婦間／恋人間でプロトタイプの期待されるべき事柄でもない)。この点で、広義での「騙す」事象表示である[cheat NP]では狭義となる(そのプロトタイプの範疇を)「欺く」事象表示に至らないことを鑑みると、cheat そのものが意味変化を引き起こして on を従えるようになったというよりは、むしろ「状況の特定化」に至らしめるために on が

してそれらの事例認識の一例を簡潔にまとめる。

- (4) a. Nathan: Did I *hang up on* you ?

Gabrielle: Oui, perhaps I called at a bad time.

[前提:「(その時点で) 電話を切らないだろう」とする想定・期待の範疇]

[結論: *hang up* の指示事象が仕向けられることによる反想定・反期待事象の生起]

— 映画 *Human Nature* (2001) 〈00:37:31〉

(イタリック体・[] 内表記筆者)

- b. Ellie: I can't *walk out on* King now.

[前提:「出ていかない(見捨てない)であろう」とする想定・期待の範疇]

[結論: *walk out* の指示事象が仕向けられることによる反想定・反期待事象の生起]

— 映画 *It happened One Night* (1939) 〈01:32:40〉

(イタリック体・[] 内表記筆者)

- c. Brian: Stephen, don't you *die on* me now, you hear me ?

[前提:「先立たないであろう」とする想定・期待の範疇]

[結論: *die* の指示事象が仕向けられることによる反想定・反期待事象の生起]

— 映画 *Backdraft* (1991) 〈02:02:36〉 (イタリック体・[] 内表記筆者)

↘ 発揮し得る「(或る種の行為が仕向けられることによって生じる犠牲と相反する) 前提としての或る種の期待」を喚起させるフレーム効果をあえて導入した、と捉えることもできよう。

d. Annie: D-Don't *give up on* me, Jack. Come on, please.

[前提：「(自分が困るから) 諦めないであろう」とする想定・期待の範疇]

[結論：give up の指示事象が仕向けられることによる反想定・反期待事象の生起]

— 映画 *Speed* (1994) <01:22:41> (イタリック体・[] 内表記筆者)

なお、再確認となるが、これまでの論旨の妥当性は次の(5)のような実例からも支えられる。

(5) Anakin: I knew they were still alive. I told you we shouldn't *give up on* them.

— 映画 *Star Wars: the Clone Wars*, Season 2, Episode 6: Weapons Factory <00:43:35> (イタリック体筆者)

このシーンでは、敵の基地を破壊することと引き換えにその衝撃で生き埋めとなった仲間二人がまだ生存していると信じて見捨てるべきではないとする考え方が示されているが、その二人はモールス信号の原理を利用して助けを求めている。つまり、地中に閉じ込められた二人は「助けてほしい」と期待しており、その前提には、発話者である Anakin が生に対する二人の強い意思を理解し、必ず助けに来てくれるような信頼に値する人物であると信じる気持ちが存在している。したがって、もし Anakin がそうした想いを汲みとろうとしない事態が発生した場合、それは二人にとって想定・期待の範疇外 (UNEXPECTED)、すなわち「本来的な想定・期待とは相反する」ことであり、その信頼を裏切りたくない Anakin の意志が [(shouldn't) give up on NP] の形態に反映されていると考えられるのである。

4. おわりに

森山（2015, 2016, 2018）から本稿に至るまで、一貫して「語彙学習指導のための what to teach」に関するより厳密な見解を如何なる論拠でもって導き出すべきかという「抽出プロセス」の在り方を論じ続けてきた。本稿の冒頭でも述べたように、これまで見てきた数々の先行研究では、学習者の母語とは異なる構造を持つ学習対象言語に対し、語句の多義性や連語表現の意味のからくりを提示することで、学習者の知的好奇心をも満たそうとする取り組みが示されており、筆者も大いに参考とした。ただ、抽出プロセスの基盤が不安定であるならば、必然的にその実践内容にも狂いが生じ得ず、少なくとも学習対象言語における母語話者の直観に沿ったものではなくなってしまう可能性も孕んでいる。本稿の論考内容で言えば、[cheat on NP] が示す言語世界においては被浮気対象に心的圧力など存在せず、また、現実世界においても（配偶者や恋人などに）浮気の事実が知らされない限り、そのような圧力が発生する機会もない。したがって、我々の日常経験にさえ合致しない指導内容を展開することは「理解」を手繰り寄せようとする学習者のベクトルには沿い難いと考えられる。また、「物理的接触—[抽象的接触]→影響」という意味変化が突然「不利益」の認識を生み出す（もしくは直結する）ように感じさせる論旨の展開も学習者の混乱を招きかねない。一方で、本稿の執筆に際して、でき得る限りの先人の方々の研究に目を通すと同時に丹念に一つひとつの言語事実を確認しながら論考を進めてきたものの、その分析過程において主観に囚われてしまっている箇所が存在しているかもしれない。また、重要な事実を見逃している可能性も完全には排除できない。それ故、より一層の反証可能性が問われるべきであるし、その再現性も幅広く展開してさらに相対的な吟味を行

わなければならない。その意味では、本稿は、あくまでも「抽出プロセス」の在り方自体を問い直しつつ、先人の叡智、歴史的根拠、共時的視座における再現性、母語話者の認知機能などに触れながら「多角的」かつ「深察的」論考をもって慎重に研究を進める必要性を改めて自省する主旨に基づいている。

謝 辞

京都産業大学阿武尚人先生（認知言語学・英語教育学）には拙稿の隅々までお目通し頂き、貴重なご助言ばかり頂きました。さらに、福森雅史博士（認知言語学、スペイン語学・ポルトガル語学）、日羅教育科学協会 Oana MORIYAMA 氏（教育学・言語心理学）には他言語における同概念表示語句との異同を共に検討して頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

末筆となりましたが、ご逝去なさいました永井博史先生には、永井ゼミ・森山ゼミによる合同イベントを共催頂いたことを始め、「ドイツ語と日本語の発声方法の相違は、各々の狩猟文化／農耕文化が大きく関わっているからではないか」といったご助言を頂くなど、専門分野の垣根を超えた種々の知見のご教示まで賜りました。常に温かく接して頂いたお姿を偲びつつ、改めて心より深謝申し上げます。

参考文献

- Anno, N. (2014) “A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case of English Business Terms,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 115–122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Beitel, D. A., R. W. Gibbs and P. Sanders (2001) “The Embodied Approach to the Polysemy of the Spatial Preposition *on*,” in Cuyckens, H. and B. Zawada (eds.) *Polysemy in Cognitive Linguistics*, 241–260. JJA Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Special Technical Report, Massachusetts Institute of Technology. Research Laboratory of Electronics, No. 11. Cambridge: M.I.T. Press.
- Cook, W. A. (1969) *Introduction to Tagmemic Analysis*. (Transatlantic series in linguistics) New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. New York: Heath.
- Fillmore, C. J. (1968) “The Case for Case,” in Bach, E. and R. T. Harms,

- (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1–88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Grice, H. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gruber, J. S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North Holl.
- Halliday, M. A. K. (1977) *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. (Longman Linguistic Library) New York: Longman.
- Hjelmslev, L. (1969) *Prolegomena to a Theory of Language*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Jespersen, O. (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. III. Heidelberg: Carl Winter.
- Jespersen, O. (1984) *Analytic Syntax*. Chicago: University of Chicago Press.
- Koyama, M. (2015) “The Influence of Linguistic Distance on Language Learning,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 24–29. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Kruisinga, E. (1931) *A Handbook of Present-Day English*, Vol. 4. P. Groningen: Noordhoff.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lamb, S. M. (1966) *Outline of Stratificational Grammar*. Washington D.C.: Georgetown University Press
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. New York: Mouton de Gruyter.
- Levi, J. (1986) “Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions,” in Peter, C. and V. Raskin. (eds.) *The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s*, 230–265. Norwood: Albex.
- Lindstromberg, S. (1997) *English Prepositions Explained*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adolescențului*. Brasov: Universitatea Transilvania: Facultatea de Psihologie și Științe ale Educației.
- Moriyama, O. (2015) “A Pedagogic Approach to Japanese Culture: through the Animated Film *Spirited Away*,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 104–108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

- Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Teaching Way for Japanese Students: through the Concepts of English Prepositions,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 2, 17–24. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Study of English Education through Cultural Frame: from a Comparative Perspective with Japanese Identity,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 3, 98–108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2012) “Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan: from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 4, 21–31. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2013) “Nation and Language,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 5, 45–55. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2014) “A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies’ System at the International Course and the English Seminar of Kinki University: along with the UNESCO’s Recommendation concerning International Education,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 8–18. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2015) “A Cognitive Approach to Japanese Popular Culture: through the Love Songs of Koji TAMAKI,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 82–87. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2016) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artificial Intelligence: through the Concepts of Information-Technology Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 2, 29–34. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2017) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artificial Intelligence: through the Concepts of CONSCIOUSNESS -MEMORY Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 3, 83–88. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2018) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artificial Intelligence: through KANSEI Communication,” in Oprescu, E. et. al., *Omul*

- și Universeul*, Vol. 4, 57–61. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (forthcoming; 2019) “A Cognitive Approach to the Concept of [fall victim to NP]: Interfaced with its Syntactic Phase,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 5. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T., M. Fukumori, O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 2. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T., M. Fukumori, O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 1. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Okuno, T. (2014) “A Cognitive-Linguistic Analysis of the English Preposition ON,” in the *Bulletin of the Faculty of Education*, 112, 71–79. Hirotsaki University.
- Poutsma, H. (1928) *A Grammar of Late Modern English*, Part I. 2nd ed. Groningen: P. Noordhoff.
- Reba, D. (2010) *Facing Forward – A Life-Reclaimed*. New York: Mondial.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Concept Structuring System (Language, Speech and Communication)*. Cambridge: MIT Press.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. New York: Longman.
- 池上嘉彦 (1975)『意味論 一意味構造の分析と記述一』, 大修館書店: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2003)『イメージ&カテゴリーの英単語』, かんぼう: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2007)「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革(その6) — 中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案: 多義性のメカニズムと認知言語学導入の研究意義 —」『研究論叢』68号, pp.1–26, 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩 (2012)「異言語教育と言語文化(その4) — メタファー研究の再考と言語文化教育の展開 —」『京都外国語大学研究論叢』第79号, pp.1–21. 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩 他 (2002)『認知意味論の諸相一身体性と空間の認識一』, 松柏社: 東京.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006)『英語教師のための効果的語彙指導法 一認知言語学的アプローチ』, 英宝社: 東京.
- 大西泰斗・マクベイ, ポール (2006)『NHK 3 カ月トピック英会話 ハートで感じる英文法』, 日本放送出版協会: 東京.
- 大西泰斗・マクベイ, ポール (2009)『大西泰斗のイメージ文法』, 株式会社DHC: 東京.

- 小西友七 (1955) 『前置詞 (下)』 (英文法シリーズ19). 研究社: 東京.
- 福森雅史 (2011a) 「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」(その1) —英語, スペイン語の異言語対照を中心に— 『文学, 芸術, 文化』第22巻第2号, pp. 111-145. 近畿大学文芸学部.
- 福森雅史 (2011b) 「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」(その2) —英語, スペイン語の異言語対照を中心に— 『文学, 芸術, 文化』第23巻第1号, pp. 41-95. 近畿大学文芸学部.
- 森山智浩 (2008a) 「言語教育への語彙概念導入研究 —身体経験から現れ出る空間関係づけ概念への認知言語学的アプローチ—」 『太成学院大学紀要』第10号, pp. 163-178. 太成学院大学.
- 森山智浩 (2008b) 「英語動詞 *take* に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育 —認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して—」 『近畿大学英語研究会紀要』第2号, pp. 79-98. 近畿大学英語研究会.
- 森山智浩 (2015) 「[Enter into NP] の概念研究 —認知言語学的アプローチ—」 『近畿大学 法学』第62巻第3・4号, pp. 187-245. 近畿大学法学会.
- 森山智浩 (2016) 「[Depend on NP] の概念研究 —認知言語学的アプローチ—」. 『文学, 芸術, 文化』第28巻第1号, pp. 23-69. 近畿大学文芸学部.
- 森山智浩 (2018) 「[Look down on NP] の概念研究 —認知言語学的アプローチ—」. 『近畿大学 法学』第65巻第3・4号, pp. 43-92. 近畿大学法学会.
- 森山智浩・高橋紀穂・森山オアナ 他 (2010) 『英語前置詞の概念 —認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から—』 (FD 語学教育改革シリーズ1). ブイソーソリューション: 愛知.
- 森山智浩・中桐謙一郎・福森雅史・小山政史・森山オアナ (2012) 『Let's Vocabucize 1000! —イメージと映画で学ぶ英単語総合演習帳—』. 松柏社: 東京.

【Dictionaries】

- [COD] Stevenson, A., M. Waite (eds.) *Concise Oxford Dictionary*. London: Oxford University Press.
- [DELP] 瀬戸賢一他 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』. 小学館. 東京.
- [DEWME] 小島義朗他 (編) (2004) 『英語語義語源辞典』. 三省堂. 東京.
- [DWO] 梅田修他 (訳) (2009) 『シブリー英語語源辞典』. 大修館書店: 東京.
- [GEJD] 小西友七・南出康世 (編) (2002) 『ジーニアス英和大辞典』. 大修館書店: 東京.
- [KDEE] 寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』. 研究社: 東京.
- [LDCE] Quirk, R. (ed.) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman.
- [OALD] Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London: Oxford University Press.

[*OED*] Burchfield, R. W. (ed.) (1978) *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

新村出 (編) (1998) 『広辞苑』. 岩波書店: 東京.

【TV Dramas】

Grey's Anatomy (2005) (邦題: 『グレイズ・アナトミー 恋の解剖学』), Episode: Owner of a Lonely Heart (2005).

My Name is Bill W. (1989) (邦題: 『ジェームズ・ウッズの ドランカー』).

Titus (邦題: 『タイタス』), Episode: The Reconciliation (2000).

Walking Dead, The (邦題: 『ウォーキング・デッド』), Episode: Wildfire (2010).

【Film DVDs】

Backdraft (1991) (邦題: 『バックドラフト』). Imagine Films Entertainment.

Good Night, and Good Luck (2005) (邦題: 『グッドナイト&グッドラック』). Warner Independent Pictures.

Human Nature (2001) (邦題: 『ヒューマンネイチャ』). Fine Line Features.

It happened One Night (1939) (邦題: 『或る夜の出来事』). Columbia Pictures.

Kill Bill: Vol 1 (2003) (邦題: 『キル・ビル』). Miramax.

Spartacus (1960) (邦題: 『スパルタカス』). Bryna Productions.

Speed (1994) (邦題: 『スピード』). Twentieth Century Fox Film Corporation.

Star Wars: the Clone Wars (2008–2015) (邦題: 『スター・ウォーズ／クローン・ウォーズ』). Warner Home Video.

【Websites】

150 Years Ago Today

URL: <http://150yearsagotoday.blogspot.jp/2011/08/1861-august-17-stribling-springs.html>

TOSHIN TIMES on Web, 「憧れの職業を迫え！言語学者編」

URL: <http://www.toshin.com/news/job/0702.php>

Travel / Food / Art

URL: <https://divyadeepakrao.com/category/from-my-kitchen/baking/cake-decorating/>

『語源由来辞典』

URL: <http://gogen-allguide.com/>